第42回
日本ケルト学会
研究大会　プログラム

日時：　2022年10月22日（土）～23日（日）

会場：　鹿児島大学　郡元キャンパス　総合教育研究棟 1階 102号室

大会責任者 梁川英俊（鹿児島大学法文学部）
（連絡先 yanagawa@leh.kagoshima-u.ac.jp）

ハイブリッド形式（対面参加またはZoomでのオンライン参加）

- Zoomへのリンクは、大会一週間前に会員用メーリングリストにてお送りします。
- 参加費：会員は無料／非会員500円（対面参加の場合のみ）

第４２回　日本ケルト学会　研究大会　プログラム

10月22日(土)

13:30~　受付開始

14:00　挨拶　代表幹事　梁川　英俊

14:00～14:45　研究発表 １　ヤン＝ファンシュ・ケメネールの功績について
発表者　梁川英俊　司会　小池剛史

14:45～15:30　研究発表 ２　「ケルト」をまとう―
文芸復興期とアイルランド自由国におけるナショナル・アイデンティティの表象―
発表者　森野聡子　司会　不破有理

15:45～17:15　講演　琉球列島人の起源(奄美・沖縄諸島を中心に)
講演者　高宮広土　司会　梁川英俊

17:30　懇親会

10月23日(日)

10:00～　受付開始

10:30～11:15　研究発表 ３ アイルランドの樹木:伝承と実用
発表者　平島直一郎　司会　辺見葉子

11:15～12:00　研究発表 ４ 「古代性」と「ケルト性」のあいだ―
Alexander George Richey の「ブレホン法」観を再検討する
発表者　廣野元昭　司会　平島直一郎

12:00～12:15　総会

12:15～13:15　昼食

13:15～16:00　フォーラム・オン　奄美のケンムンを「ケルト」の視点から見る

発表 １　奄美のケンムン伝説について
発表者　梁川英俊

発表 ２　スコットランドの超自然的存在とフォークロア・アーカイブ
発表者　岩瀬ひさみ

発表 ３　アイルランドの初期フォークロア集にみる妖精たち
発表者　辺見葉子

16:00　閉会の辞　大会責任者　梁川　英俊

講演

琉球列島人の起源（奄美・沖縄諸島を中心に）

The Origins of the Ryukyu People (mainly focusing the Amami and Okinawa Archipelagos)

講演者： 高 宮 広 土
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

先史時代における人間集団の移動を復元する際、考古学的データのみならず、言語学および人類学（遺伝学・古人骨学）のデータを総合的に分析して、その答えを導き出そうというアプローチが近年盛んに実施されるようになっている。その結果の一つとして、インド・ヨーロッパ語の伝播は農耕民の移住によるものであった可能性が多くの研究者により支持されている。

ユーラシア大陸の南東に位置する琉球列島においても奄美・沖縄諸島を中心に現代琉球列島の人々の起源に関しての研究が盛んに行われていた。しかし、考古学、言語学および人類学はそれぞれの分野で研究が実施され、以下の仮説が提唱された。人類学では旧石器時代から人類集団が継続して今日の奄美・沖縄人へと進化したと考察されていた。言語学は100年以上前から日本語と琉球語の類似点を指摘し、2/3世紀～6/7世紀に日本語と琉球語は分岐したとみなしていた。考古学は旧石器時代からその後の貝塚時代の連続性について積極的に意見はなかったが、どちらかというと人類学の考察を支持していたようである。

本発表では、人類学、考古学および言語学の最新のデータをもとに、奄美・沖縄諸島を中心に琉球列島人の起源について紹介したい。

フォーラム・オン　趣旨説明

奄美のケンムンを「ケルト」の視点から見る

Amami's "Kenmun" from the viewpoint of the Celtic Studies

奄美群島には、昔からケンムン（ケンモンなどの書き方もあり）という正体不明の存在にまつわる伝承が数多くあります。

私自身、奄美でケンムンの話を聞いたことは何度もあります。宿屋のおばさんや唄者のおじいさんが、「ケンムン話」になると急に目をギラギラさせて饒舌になり、言葉も知らぬ間にシマグチに変わって、こちらはその意味を推測しつつ、頷きながら耳を傾けるという経験をしてきました。「夜中に得体のしれない光が見えて、それを確かめに行った友人が数日後に気が狂った、ケンムンの仕業だ」とか、「山道で後ろから足音が聞こえてきて、ケンムンかなと思ったら投げ飛ばされた」とか。

最近はそんなケンムン話をしてくれるお年寄りも少なくなりました。若い人はケンムンのことは口にしないので、最近ケンムンは奄美からいなくなってしまったのかと思っていたら、今年になって宇検村に「ケンムンの館」なる施設がお目見えしました。世界自然遺産登録とともにケンムンも復活しつつあるようです。

ところで、この手の話なら、ケルト諸語圏も負けてはいません。「ケルト」の妖精を妖怪と対比する試みは以前から行われていますし、『奄美に生きる日本古代文化』の著者金久正氏も「アイルランドの農民たちがまだフェアリーの存在を信じているのと同じく、この島でもケンモンの存在を信じているものが多」い、とケンムンとフェアリーを結び付けています。

ケンムンを理解するうえで、ケルト諸語圏の妖精との対比は本当に有効なのでしょうか。今回のフォーラム・オンでは、奄美のケンムンをケルト学の視点から考えてみたいと思います。

（文責：梁川　英俊）

フォーラム・オン発表 1

奄美のケンムン伝説について

Amami's "Kenmun" Legends

発表者：梁 川 英 俊
（鹿児島大学）

日本に妖怪話は数多くあるが、その伝承がいまも信憑性をもって伝えられているという点では、奄美群島のケンムン話にまさるものは少ないのではないか。奄美のケンムンに関する最初の記述は、すでに幕末の薩摩藩士・名越左源太（1819～1881年）がまとめた奄美大島の地誌『南島雑話』に見られるが、その後ケンムンの伝承に熱心に取り組んだ人として、「ケンムン博士」の異名を持った恵原義盛氏（1905～1988年）がいる。本発表では、氏の研究歴や研究方法等を振り返りつつ、著書『奄美のケンモン』（海風社、1984年）にまとめられた伝承を中心に、文献に記された伝承から伺えるケンムン像を紹介・考察してみたい。

フォーラム・オン発表 2

スコットランドの超自然的存在とフォークロア・アーカイブ

Supernatural Beings in Scotland and Folklore Archives

発表者： 岩瀬ひさみ
（日本ケルト学会会員）

「心の広い族長中の族長よ、グルアガッハ、バンシー、グラシュティク、バンニー…から、丘陵のフア、渓谷のウリシュク…から私とまわりのものすべてをお守りください」という祈りの言葉が*Carmina Gadelica*にある。リストアップされているのは超自然的な存在（妖精／妖怪）の名前である。キリスト教の神を氏族の族長にたとえ、祈りに俗信が混在している。ハイランド地方ではあらゆるロッホ（湖）に水馬が棲むと言われ、人魚を目撃した話もある。かつて人は、海、山、丘陵、湖、渓谷、川、荒野など人の生活圏を囲む自然環境の中に不思議なものの存在をリアルに感じて怖れていた。それは日本でもスコットランドでも同じだ。

Edinburgh大学のSchool of Scottish Studiesの録音アーカイブは1930年代から主にフィールドワークの成果である約33000件の録音資料を保管している。それらはスコットランドの人々の間で伝承されてきた歌謡、音楽、歴史、詩、慣習や物語に関する資料である。インタビューや語りの中には超自然的存在についての話もたくさん含まれる。録音資料の一部はTobar an Dualchais（伝承の泉）／Kist o Riches（宝箱）というウェブサイトで公開されている。現地のアーカイブでしか入手できなかった一次資料が、比較的容易にアクセスできるようになった。

フォーラム・オン発表 3

アイルランドの初期フォークロア集にみる妖精たち

Irish fairies in early folklore collections

発表者： 辺見葉子
（慶応義塾大学）

アイルランドなどケルト諸語圏の妖精民間伝承は、中世の神話的物語や騎士道ロマンスに登場する妖精など文学作品における妖精の系譜とは異なり、口承によって語り伝えられてきたものである。

これら口承による妖精伝承は、19世紀になって網羅的に収集・出版された。口碑伝承の収集、編集に携わったのは、トマス・キートリーやクロフトン・クローカーなどアイルランド人（アングロ・アイリッシュ）だが、アイルランド語で採集された妖精譚はキートリーやクローカーによって英語に翻訳され、伝承の担い手たちのコミュニティから離れた英国、ロンドンで出版された。

「妖精伝承の宝庫としてのアイルランド」を世に知らしめたキートリーやクローカーは、アイルランドに当時も息づく妖精譚がヨーロッパの神話体系の一部であるという意識を持っていたわけだが、改めて彼らのフォークロア・コレクションを読みとき、アイルランドの妖精たちの姿にアイルランドの土地や自然に根ざしたものが認められるのかどうか、もしあるとしたらどのような点においてなのか、紹介・考察してみたい。

研究発表 1

ヤン＝ファンシュ・ケメネールの功績について

Yann-Fañch Kemener: sa contribution à la culture bretonne

発表者： 梁 川 英 俊
（鹿児島大学）

1970年代からブルターニュの代表的な民謡歌手として活躍してきたヤン＝ファンシュ・ケメネールは、2019年3月16日にフィニステール県トレメネンの自宅で死去した。3月19日に生まれ故郷サント＝トレフィーヌで行われた葬儀には1500人を超える人々が集まったという。

発表者は2002年にケメネールが初めて日本を訪れた際に初めて彼と知り合い（このとき彼は立命館大学で行われた本学会の研究大会で講演もした）、以来ブルトン語圏の文化について多くのことを教わってきた。2003年には16日間にわたって自宅で生活を共にし、その民謡歌手としての活動を身近で見る機会も得た。

ケメネールは1970年代のブルターニュの文化復興運動の時代に歌手としての活動を始めた。しかし、その活躍は歌手のみにとどまらず、民謡や民話の採集、ブルトン語の教育活動など多方面に及ぶ。

本発表では、生前のケメネールの活動を、発表者自身が撮影したビデオや写真等の映像を交えながら振り返り、そのブルトン語文化への貢献について考えてみたい。

研究発表 2

「ケルト」をまとう―文芸復興期とアイルランド自由国における

ナショナル・アイデンティティの表象―

Wearing ‘Celtic’: Representations of the National Identity in the Irish Literary Revival and the Irish Free State

発表者： 森 野 聡 子
（静岡大学）

連合王国からの自治・独立をめざすアイルランドのナショナリズムにおいて、19世紀末に始動したアイルランド文芸復興は、「ケルト復興」という呼び名が示すように、「ケルト」としての民族的ルーツを前提にアイルランドの文化的独自性を確立しようとした。そして、イースター蜂起、独立戦争を経て1922年に誕生したアイルランド自由国もまた、新貨幣の図柄に「ケルト的」なデザインを採用するなど、ネイションのアイコンとして「ケルト」を活用、その戦略は1937年の新憲法でエールと国名を変更した後も踏襲された。本発表では、19世紀末から1930年代におけるアイルランドの文化的ナショナリズムにおいて「ケルト」として表象されたものが何であったのかを具体的に分析することを通じて、アイリッシュ・アイデンティティの構築に果たしたケルト言説の役割を考察する。

研究発表 3

アイルランドの樹木：伝承と実用

Native trees of Ireland: Folklore and Practical Use

発表者： 平島直一郎
（西南学院大学）

2018年に東京研究会で行った研究報告をさらに掘り下げた報告である。

近年日本において、とくにヒーリング系の新興宗教的あるいは神秘主義的分野でなされてきた「ケルト」の樹木に関する言及は多々ある。それらは、しかしアイルランドの樹木に関するさまざまな伝承をもとにした、あるいはそう謳ったほとんど創作に近いものであった。引用者が自己の主張を正当化せんがために、歪められ、恣意的に紹介されたものに過ぎなかったことは、すでに前報告で指摘した。

今回は、前回と同様に、一般啓蒙書ではあるが、研究論文や一次資料を土台として著述されたNiall Mac Coitir, *Irish Trees --- Myths, Legends & Folklore* (The Collins Press, 2003) におけるアイルランドの樹木に関する伝承から実用にいたるまでの詳細にわたる知識をまず俯瞰する。そのうえで、さらに初期アイルランド文学作品や、それ以降の近代に至る伝承の中に現れる樹木に関するさまざまな言及と比較し、それぞれの樹木に対するイメージと実用の関連性まで掘り下げたい。時間的制約のために、本報告で主要な樹木全体を取り扱うのは難しいので、とくに重要な樹木を取り扱いたい。

研究発表 4

「古代性」と「ケルト性」のあいだ

―Alexander George Richey の「ブレホン法」観を再検討する

Between “archaic” and “Celtic”: Re-examination of A.G. Richey’s View on “Brehon Law”.

発表者： 廣野元昭
（日本ケルト学会会員）

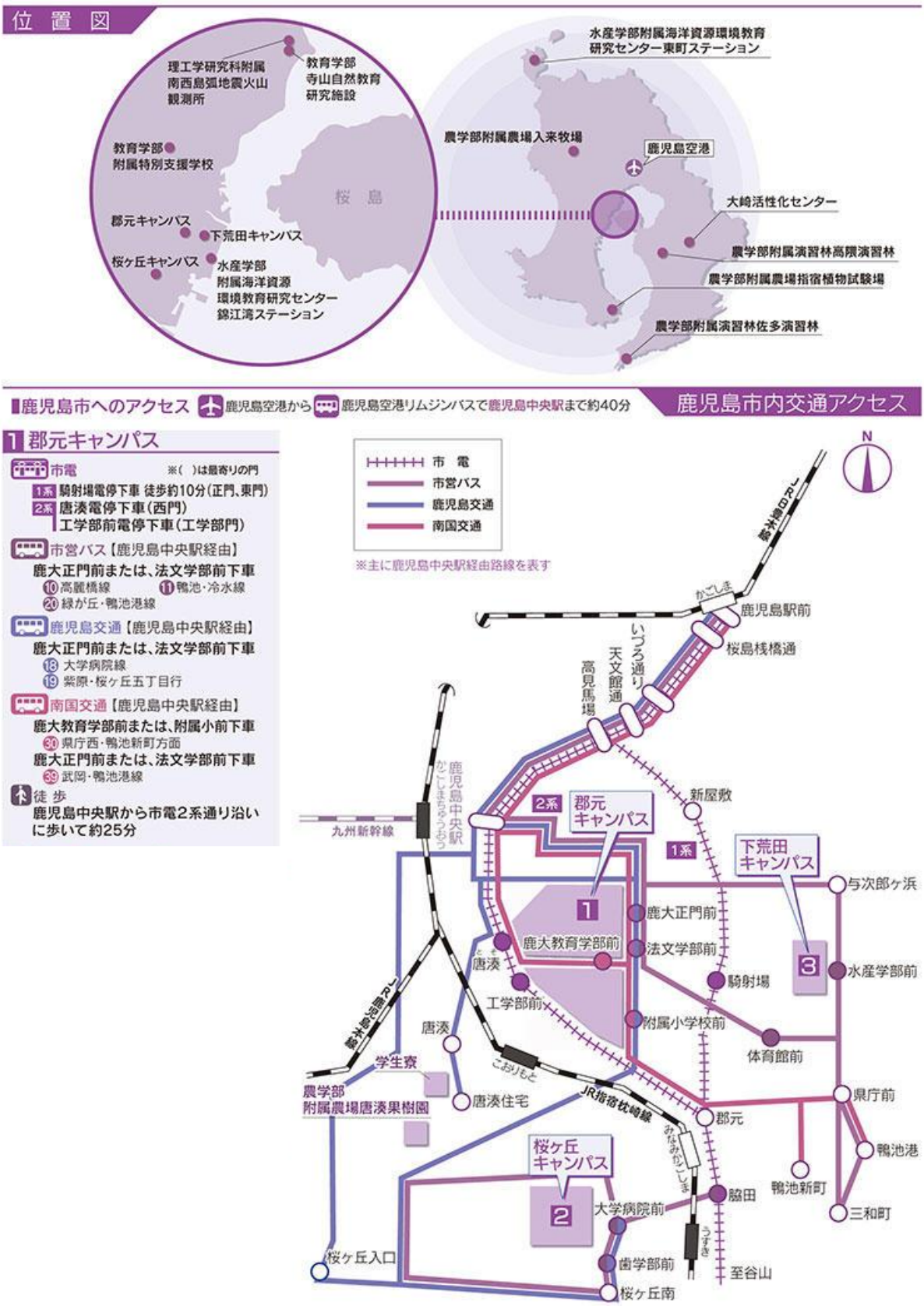
本報告では、*Ancient Laws of Ireland* Vol.3-4 の編纂に携わったAlexander George Richey（1830-83）の「ブレホン法」観を再検討する。Richeyら、いわゆる英国歴史学派と呼ばれた一派は、19世紀の英国の法思想、法政策、特にアイルランド政策に大きな影響を与えたとされてきた。これについては、Clive Dewey, “Celtic Agrarian Legislation and the Celtic Revival: Historicist Implications of Gladstone's Irish and Scottish Land Acts 1870-1886,” (*Past and Present* 64-1 (1974) pp.30-70) が、近年に至るまで数多く引用されており、日本では松尾太郎が、「イギリス歴史主義とアイルランド政策」（『アイルランドと日本』1987所収）において引用・依拠している。しかし実際にはDeweyの理解は大きな問題をはらんでおり、Richeyが当時の法進化論と、実際の「ブレホン法」に見られた特徴との齟齬を弥縫したその理路は、あらためて辿り直す必要がある。Richeyの翻訳・編纂はのちの研究者から大きな批判を浴びたが、にもかかわらず彼の主張の一部が存外に長く生き延びたことも見えてくる。

2022年度　日本ケルト学会　総会　議題

1. 2021年度決算報告および監査報告
2. 2022年度予算について
3. 日本ケルト学会幹事改選結果
4. その他

会場案内:

〒890-8580 鹿児島市郡元 1丁目 21番 24号
鹿児島大学:郡元キャンパス 総合教育研究棟 1階 102号室



郡元キャンパス

法文学部　理工学研究科
教育学部　臨床心理学研究科
理学部　連合農学研究科
工学部
農学部
共同獣医学部

1 北辰通り（大正4年第七高等学校第14回記念祭歌「北辰斜に」に由来）
2 銀杏並木通り
3 稲盛通り（稲盛和夫京セラ名誉会長の寄贈の稲盛会館に由来）
4 田園通り（附属農場越しに桜島が望めます。）
5 みのりの小径
6 本部前・緒方通り（初代学長　緒方健三郎氏に由来）
7 植物園通り
8 ふれあい通り
9 教育学部通り
10 玉利通り（鹿児島高等農林学校初代校長　玉利喜造博士に由来）
11 工学部通り
12 理学部通り
13 森の小径
14 法文学部通り

A-

1 インフォメーションセンター
2 事務局
3 保健管理センター
4 埋蔵文化財調査センター・事務局車庫
5 農・獣医共通棟（管理室・講義室・学生実験室・セミナー室）
6 共同獣医学部研究棟 A（獣医学科実験研究室）
7 共同獣医学部研究棟 B（獣医学科実験研究室）
8 農学部研究棟 C
9 農学部研究棟 D
10 農学部研究棟 E
11 共同獣医学部附属動物病院大動物診療センター
12 共同獣医学部附属動物病院軽種馬診療センター
13 農学部附属焼酎・発酵学教育研究センター（北辰蔵）
14 〃　温室
15 〃　植物研究実験施設
16 〃　網室・硝子室
17 〃　附属農場動物飼育棟
18 〃　附属農場研究実習棟
19 〃　低温貯蔵実験棟
20 〃　水理実験棟
21 〃　昆虫飼育棟
22 共同利用棟（獣医学科実験研究室・総合研究博物館・先端科学研究推進センター（感染制御研究部門）等）
23 先端科学研究推進センター（遺伝子実験部門）
24 先端科学研究推進センター（アイソトープ実験部門）
25 馬術部馬房
26 大学院連合農学研究科棟
27 総合研究博物館展示棟（常設展示室）
28 学習交流プラザ
29 大学会館
30 中央食堂
31 -1 産学交流プラザ 1（地域防災教育研究センター）
31 -2 産学交流プラザ 2（南九州・南西諸島域イノベーションセンター）
32 情報基盤統括センター
33 中央変電所・総合研究博物館標本収蔵庫
34 工学部情報・生体工学棟
35 地域コトづくりセンター・中央実験工場
36 工学部電気電子工学棟
37 〃　建築学棟
38 〃　化学工学棟
39 〃　機械工学第一実験棟
40 〃　機械工学第二実験棟
41 〃　機械工学第三実験棟
42 〃　機械工学 2 号棟
43 〃　機械工学 1 号棟
44 〃　化学生命工学棟
45 〃　薬品庫
46 〃　海洋波動実験棟
47 稲盛会館
48 工学系講義棟
49 工学部海洋土木工学棟
50 〃　共通棟
51 理工系総合研究棟・先端科学研究推進センター（機器分析部門）
52 理学部 1 号館（管理室・物理・宇宙プログラム・化学プログラム・地球科学プログラム・実験研究室・講義室）、理系先端研究棟、天の川銀河研究センター
53 理学部 2 号館（数理情報科学プログラム・生物学プログラム・化学プログラム・地球科学プログラム・実験研究室・講義室）

会場　総合研究教育棟　1階　102号室

54 理学部 3 号館（生物学プログラム・実験研究室・講義室）
55 総合研究博物館
56 共通教育棟 1 号館（事務室・講義室・共通教育センター・キャリア形成支援センター・ボランティア支援センター・障害学生支援センター・グローバルセンター・高等教育研究開発センター）
57 共通教育棟 2 号館
58 稲盛アカデミー棟
59 共通教育棟 3 号館
60 共通教育棟 4 号館・環境安全センター
61 中央図書館
62 総合教育研究棟（司法政策教育研究センター・大学院臨床心理学研究科・国際島嶼教育研究センター）
63 法文学部 1 号館（管理棟・研究棟・講義棟）
64 〃　2 号館（研究棟・講義棟）
65 〃　3 号館（講義棟）
66 学生サークル会館Ⅱ－1
67 屋内プール 50m
68 弓道場
69 学生サークル会館Ⅱ－2
70 第一体育館
71 第二体育館
72 教育学部武道館
73 郡元南食堂
74 教育学部管理棟・理系研究棟
75 〃　実習棟
76 〃　第一講義棟
77 〃　生涯教育総合研究棟
78 〃　文系研究棟
79 〃　附属教育実践総合センター
80 〃　音楽美術科棟
81 〃　附属幼稚園
82 〃　附属小学校
83 〃　附属小学校昆虫飼育棟
84 〃　附属小学校体育館
85 〃　附属中学校
86 〃　附属中学校体育館
87 学生寮
88 総合動物実験施設
89 教育学部第二講義棟（アクティブラーニングプラザ）
90 共同獣医学部附属動物病院小動物診療センター
91 さっつん保育園
92 学生サークル会館Ⅰ
93 稲盛記念館